

国頭村立北国小学校校内研修

- (1) 単元名： 送り仮名の決まり
(2) 本時のめあて： 送りがなの決まりを知り正しく書こう。

「楽しく笑顔の校内研修」思議な授業がある。この人が授業をやると見ている参観者が笑顔になる。当然ふざけているわけでもなく、事前の教材研究もしっかり積み重ねられている。楽しませようと思って言葉を選んでいるのではない。…なんだろう。子どもと教師の関係、教師と教師の関係（同僚性）が、実に柔らかな自然な空気を生み出し和やかになる。

『持ち味』、人それぞれに個性がある。その人にしかない不思議な魅力がある。同僚の『持ち味』からも、多くのことを学べる。T・T先生の持ち味ってなんだろう。同僚から「学ぶ」が、単に教科の指導技術だけであってはならない。人それぞれの生き方、考え方、哲学も我々「人」として学びのテキストとなる。

本日は10月の国頭村へき地西3校の授業研究会に向けた校内研修の1コマである。目標に向かって同僚が一つになる。授業実践でつながる。すてきな授業の提供である。



[授業開始] 穏やかな空気で淡々と始まる。5年男子1名、6年男1名女1名 計3名。



この状況がすでに特別である。子どもが3名、授業者1名の4名のクラスを校長先生や同僚の先生方、私を含め5名が参観する。しかし、子ども達は何ら身構えることもない。写真①、まずは、送りがなの基本的な決まりを「集まる」と「走る」を使って確認する。授業者は、違いと、同じを見つけさせる「問い」を発信する。子どもの反応にドキドキワクワクである。



[共有する]：「集まる」「走る」で共有する。子どもの気づきを引出し決まりを確認しまとめたい授業者の焦りができる。「話してほしいと思う」とどうしても自分の言葉が多くなると、後の協議会で自己を省察していた。話してほしい授業者と語ろうとしない子ども達ではあるが、目線や仕草、表情のやり取りで「なんとなく分かっている」や「言葉にしなくても分かるでしょう。」の空気がある。誰が何が得意で、何が苦手、好きな食べ物、嫌いな食べ物まで知りつくしている。3名で多くの壁を乗り越えてきた「あうん」の呼吸がある。「いまさら」と思うところもあるが、ここは割り切って授業である。「言葉にする」ことも、この子達の未来のためには絶対不可欠である。訓練のつもりでも「子ども達に自分の考えを語らせる。」ことに妥協しないでほしい。そのためにも、教師は子どもの「思いや、考えを導き出す発問（問い）」、つまり教師が言葉を持つことが大切になってくる。本時は言語指導の単元であるので、感性の共有ではない。互いの気づきや「分からない」「分かった」「なぜ？」を対話と協同的活動（支え合う）で共有することが目的となる。



[授業終了] 送り仮名にも特別な場合もあります。特例を共有し本日のまとめへ。子どもの日記から「嬉しい」を取り上げる。素晴らしい！

[つなげる]→仲間に「つなげる」、テキストに「つなげる」、社会に「つなげる」。そして何よりも、「日常に『つなげる』。」である。学んだことを日常に活かす。学んだことで日常をリフレクションする。知識は使われて初めて「価値」を持つことになる。授業者は、3名の日記から「あれ？」をみんなで共有した。

今日の学びの価値を一気に押し上げた。「学び」は単にテストでいい点数を取るための知識であってはならない。子ども達の実生活に活かされてこそ学んだことの意義が達成される。

終末に準備していた授業者に拍手である。



[何かある] 途中まで書いていたことを「消した」。なんで？「間違い」を恐れているのだろうか？「間違い」を指摘されたくないのだろうか？分からないから教室で学ぶのである。過去に「間違い」「分からない」を持つことにトラウマがあるのではないだろうか？

